

進級によるクラス替えにともなう環境移行が 幼稚園児の仲間関係に及ぼす影響 —— 仲の良いお友達の存在が関係の広がりにもたらす 効果とその個人差 ——

中京大学心理学部 小島 康生^注

Effects of group re-formation during the transition from 4- to 5-year-old classes on peer relationships : effects of unusually intimate partners on relationship formation

KOJIMA, Yasuo (Chukyo University)

Relationships among kindergartners were examined longitudinally after groups were re-formed during the transition from 4-year-old to 5-year-old classes. Two 5-year-old classes (31 members in each class), each of which contained about half of the children in the combined 4-year-old classes, were observed once a week at 3 times during the day: morning assembly, lunch time, and evening assembly. In each setting, children could carry their own chairs and sit near their favorite partners. Based on the proximity data in these 3 settings, unusually intimate partnerships among children for each of 3 periods (April to May, June to July, and September to November) were identified by comparison with chance levels. In one of the 5-year-old classes, where about half of the children were not in the same 5-year-old class as their unusual partner in a 4-year-old class, children sat near other children who had been in the same 4-year-old class, even though they were not frequently close to each other in the earlier class, which indicates that acquaintance greatly helps to reduce the effects of the socio-environmental transition that accompanies class re-formation. Also, it appeared that partnerships among children who were in different 4-year-old classes but were assigned to the same 5-year-old classes developed a few months after class re-formation. According to a qualitative examination of the data, some partners were not in close proximity even soon after class-reformation, even though their proximity indexes were above the chance level in the 4-year-old class, and other children did not form stable unusual relationships, perhaps because their partners in their 4-year-old class were in the other 5-year-old class. In Japan, a membership in nursery school is usually organized by nursery teachers at class re-formation, as a membership in primary school is. Therefore, the effects of such re-formation on the social relationships of each member should be closely examined.

Key words: transition, observation, peer relationships, intimate partner, qualitative and quantitative approach

問題と目的

子どもの発達環境に関与するおとな

子どもが生まれ育っていく過程において、養育者は子どもや自分たちをとりまく環境世界を様々に変えていく。そうした環境は、育児用品（おむつや哺乳瓶、ベビーカー、子守帯など）やおもちゃ、絵本等に代表される「モノ」と、日々の生活の中で出会ういかかわりあう「ひと」、そしてそれらを包み込む家屋や公園、育児サークルが行われる部屋などの「場」に大別することができよう。そして養育者は、それが子どもの発達にみあったものであるか（とき

には子どもの様々な側面の発達に刺激を及ぼすか）、自分自身もそれに納得できるか（手間や不都合が少ないか、金銭的に無理がないか）などを念頭に置きながら、どのような環境を準備するのがよいかを決定しているのだといえよう。このように考えると、少なくとも発達の初期段階においては、子どもは親のそうした思いにかたどられた世界に身を置き日々の生活を送っているのだといえそうである。筆者はかつて、子どもの幼稚園を選ぶ際に親が何を条件に考え、またそこでどのような葛藤を経験しているかを調査したことがあるが、そこでも、幼稚園という場が親の複雑な思いをくぐって選ばれた環境であることが確認された（小島, 2004）。

本論で扱うデータは、その「幼稚園」という場を

注 ykojima@lets.chukyo-u.ac.jp

舞台としたものである。「幼稚園」とひとことで言っても、その具体的な生活のありようは多様である。例えば、子どもの成長はおとなの適切な導きによってあるべき方向に進むと考え、それに沿ってカリキュラムを設定している幼稚園があるいっぽうで、できるかぎりおとなによる方向付けや介入は避け、子どもの主体を重視する幼稚園もある（詳しくは、ハロウェイ、2004などを参照のこと）。しかし程度の差こそあれ、あらゆることを子ども主導で動かすことは不可能であるがゆえに、大部分のことは子どもの諸側面の発達や一人ひとりの行動特性などに鑑みながら「こうしたほうがよかろう」、「こうすることが子どもにとって望ましい育ちをもたらすであろう」とおとなが考え、その環境が子どもに提供されているというのが現実のところであろう。

おとなの提供する発達のニッチの中での子どもの育ち

以上に述べたことを Super & Harkness (1986) は発達のニッチ (developmental niche) という概念で説明している。彼らによれば、子どもの発達を取り巻く世界を構成するものは3つあり、第一が物理的・社会的状況、第二が歴史の変遷の中で生成された慣習や養育実践、そして第三が養育者の心理であるという。当然のことながら、これら3つの構成要素は独立のものではなく互に関連しあっている。そして、子どもはこうした環境 (ニッチ) の中で発達を遂げていくのだと考えられている。

では、そのようにして、いわば「おとなが準備した」環境に置かれた子どもは、それに身を沿わせるように、いわばおとなの期待に違わぬかたちで発達を遂げていくのであろうか。それとも、おとなが考えたとおりにすべての子どもが同じように発達していくのではなく、かなりの個人差がみられるのだろうか。よく考えてみると、そのようにして「与えられた」環境に子ども一人ひとりがどのように反応し、そこにどの程度の個人差があるのかを議論したものは意外に少ないように思われる。

本研究の主要なテーマは、タイトルにもあるように、「進級によるクラス替えののち、園児がどのような仲間関係を展開していくか」についてである。「クラス替え」という実践がこれまでに述べたこととどう関係しているかを以下に述べよう。

移行期としてみた進級・クラス替え

生涯発達のみにてわれわれの人生にはいくつかの移行期があるとされる。移行期とひとことで言っ

てもその様態は様々だが、入園や入学、転居など、子どもが経験する移行期はじつのところ、多くの場合、子どもの意図とは無関係におとなや社会によって準備されたものであることがわかる。本研究が扱う「クラス替え」という実践もまた、多くの場合はおとなが「子どものため」に行っているものであることをここで改めて確認しておくことが必要である。

では、そもそもクラス替えはどのような経緯でわが国に定着してきたのだろうか。筆者が調べたかぎりにおいて、その歴史的な変遷については十分な資料がないように思われたが、長田・遠藤・石井・桜井 (2000) によれば、少なくとも小学校では1940年代から50年代にかけて全国に広がり、それ以降も一貫して増えつづけてきたのだという。いまや進級時にどのような学級編成を行うかの判断は、基本的に学校の判断に委ねられているそうだが、全体としてみるとクラス替えを実施しているところのほうが一般的で、その目的もおおむね学力の向上や生徒どうしのトラブル・いじめの回避等にあるのだという。本研究の調査対象である幼稚園などでは、想像するに、子どもに極端なストレスを与えることなく友達関係の広がりを促すことがクラス替えにおいて重要視されているのではないだろうか。

いずれにせよ、おとなの主導で展開されている、このクラス替えという移行期が子どもにとってどのような経験なのか、それを契機に仲間関係がどのように変化するかという問題は、子どもの発達にかかわる研究者、実践者にとっても重要なテーマといえよう。

入園・進級等の移行期を通じて起こる子どもの仲間関係の変化：先行研究の概観

先行研究の中でも、入園や入学、進級等を子どもにとっての移行期とみなし、その過程において子どもの行動や仲間関係にどのような変化が起こるかを論じたものがいくつかある。とくに小学校では、たいていの場合ひとつの学年に複数の学級が存在し、先述のとおり進級時にクラス替えを行っているところが多い。そして、それらのことを扱った研究の中でよく取り上げられるのが、新しい学年に進級したときに前の学年 (ないし幼稚園時) からかかわりのあった仲間との関係がどう変化するか、また従来から続く仲間の存在が新しい環境においてどのような役割を果たすのかを検討したものである。たとえば、小川・市河 (1974) は幼稚園から小学校への移行過程に着目し、ある大学の付属小学校1年生のク

ラスを対象に、同じ系列の付属幼稚園から進学してきた生徒と外部の幼稚園から入学してきた生徒が混在する状況で、付属幼稚園出身者どうしの関係がしだいに分散していく過程を明らかにしている。八野・高橋・岸・岩立（1990）や高橋・岸・岩立（1993）もまた、同様の視点で小学校入学から2年間（ないし6年間）の友達関係の変化を調べ、付属幼稚園出身者とそうでない生徒がほぼ半数ずつ含まれるクラスにおいて、付属幼稚園出身者どうしの関係がいくつかのクラスに分かれること、時期を経てそのクラスが離合集散を繰り返していくことなどを明らかにしている。この研究では、幼稚園時代の関係にまでさかのぼり、当時仲が良かったか、もしくはそれほど親密でなかったかという情報まで分析に使用しており、きわめて貴重なデータといえる。

幼稚園児を対象としたものとしては、謝の研究がある（謝，1999）。謝は、入園後の園児の仲間関係の形成過程を縦断的に調べている。そのなかでは、入園以前から顔見知りであった「知りあい」と、それ以上に深いつながりがあった「友達」との関係が、入園後も持続するのかが分析されている。その結果、「知りあい」との関係は入園直後にこそみられるものの時期を経るに従って次第になくなっていくのに対し、「友達」との関係は少なくとも入園から半年程度は継続することが確認されている。謝の研究では、丹念な個別観察が行われている点は評価できるものの、観察対象が数名に限定されている点が物足りない。いっぽう、稲垣らの研究（稲垣・本郷・伊藤・鈴木・小泉，1998）は、対象をクラス全体にまで広げた大規模な内容となっている。稲垣らは、保育園の建て替えを機に転園することが決まった20数名の園児（3，4，5歳）が、先行園でのクラスメート、及び転園先の園児との関係をどのように維持、展開していくかに注目し、分析している。それによると、もともと同じ園に所属していた仲間どうしの関係を軸にしながらも、次第に転園先の園児とも関係の輪を広げていく様子が確認されたという。

そもそも新たな環境への移行時に大きなストレスが伴うことは容易に想像できる。そうした状況において少しでも顔見知った人物が近くにいれば、ひとはおのずとその人物とのつながりをよりどころにするであろうし、ましてやその相手との関係がただのクラスメート以上に親密なものであったとすれば、その関係は互いにとって大きな心のよりどころとなる。Wapner & Demik（1992）はこれらの現象を理論的に精緻化する過程でそうした役割を担う人

物を「社会的アンカーポイント（アンカーパーソン）」と呼んでいる。また、高濱・無藤（1997）は、前年度から持ち上がりで進級した児と新たに入園してきた児が混在する集団での観察を通してこの現象がじっさいに存在することを確認している。おそらく幼稚園のような場でクラス替えを行う際には、多くの場合、仲の良い者どうしができるかぎり同じクラスになるように、またそのことにより園児一人ひとりに心理的な負担が重くのしかからないように、またこれに加えて、それでもなお新しい仲間関係づくりも展開していけるように、とのおとな側の配慮がなされているものと思われる。本研究では、そうしたアンカーパーソンの存在が新たな環境での子どもの仲間関係にどのような影響を及ぼすのかを明らかにすることが大きな目的である。

方法論上の検討

以上のことを検討するにはどのような方法が適当であろうか。いわゆる仲良し関係（中島，2000）を把握するためには、研究者自身がある一定の手続きで園児の観察を行い、主として数量的な指標でそれをあらわすことがよく行われるが（例えば、謝，1999；高濱・無藤，1997）、そのほかにも、園児それぞれに「一緒に遊びたいお友達」等を尋ね、それを元に仲間関係を把握する方法もある（例えば、原，1997；高橋ら，1993）。本研究では前者、すなわちじっさいに園児の様子を観察する手法を選択した。それというのも、園児に口頭で尋ねるやり方には倫理上の問題が指摘されているほか、子どもによっては「遊びたいお友達」の捉え方にかなりの個人差があり、1名ないし2名のごく限られた相手を選択する児から、クラスメートの半分以上を選択する児まで、「遊びたいお友達」の範囲が一樣ではないからである。

観察場面や観察方法も様々である。もっとも一般的な方法は、観察対象を限定し、自由遊びなどの様子を記録するやり方であろうが、本研究では観察を行った幼稚園の特色を生かし、着席場面を観察場面と設定した。方法のところでも改めて述べるように、この幼稚園では、朝のごあいさつの時間、昼食の時間、そして帰りのごあいさつの時間の3つの場面で園児が椅子を円状に並べて着席する様子が観察された。しかもその着席位置は固定ではなく、園児が自由に自分の好きな場所に座れるようになっていた。先行研究（例えば、外山，1998）でも指摘されているように、そうした場面では、仲の良い友達と隣ど

うしに座ることが園児にとってたいへん大きな意味を持つ。じっさい筆者が観察を行っている際にも、どうしても隣に座りたい相手と隣どうしになれずにいつまでも席が決まらない様子や、ある友達の隣に何がなんでも座ろうと自分の椅子を強引にねじ込む様子、またいったん椅子の位置が決まったあとでも、隣どうしに座っていた二人が示し合わせるようにして一緒に別の場所へ移動する様子など、「近くに座る」ということが園児にとってどれほど重要な意味を持つかが再確認できるような場面に何度も出くわした。

考えてみるに、自由に動き回れるような遊び場面と違って着席場面では、いったん場所が決まると一定時間はそこに位置が固定されてしまうという特徴がある。したがって、空間的に近いということが情緒的な近さをあらわす度合いは、他の場面よりも強いのではないかと考えたのである。

本研究の目的

改めて本研究の目的をここに記す。本研究では、幼稚園の年中クラスから年長クラスへの進級に伴って行われたクラス替えに着目し、それによって仲間関係がどのように変化していくかを明らかにする。その際に注目するのは、年中クラスで同じクラスにいた相手や、その中でもとくに仲の良かった相手との関係、あるいは進級後新たに同じクラスになった相手との関係が時期を経てどのように変化するかについてである。先行研究の結果から、全体としては、年中クラスで仲の良かった相手が同じクラスにいた場合のほうがその関係を軸としながらも新しい仲間関係を展開していく傾向があるのではないかと予想した。

ただし、そうしたアンカーパーソンの存在がクラス替えを通じて子どもの仲間関係の発達に影響する、そのありようは必ずしも一定ではないとも考えた。平均値としてのデータだけでなく、個別データにまで目を向けることによって、おとなが「こうであろう」と予想する、あるいは期待することがすべての児に一樣に起こっているわけではないことを確認したいと考えたのである。

方法

調査を行った幼稚園

本研究の観察調査は、名古屋市のある私立の幼稚園において行った。昭和10年に創立された歴史と

伝統のあるキリスト教系の幼稚園で、自由な雰囲気の中で子どもの自発性、創造性を育むことに重きを置いた保育がなされていた。また、この幼稚園では、園児の送り迎えは基本的に親（ないしそれに代わる者）が行うように決められており、原則として毎日弁当を持参するところも大きな特色であった。親は大半が専業主婦であった。

在園児数は、その年によって多少の変動があるものの、おおむね180名前後、年少クラスが3クラス（1クラスおよそ20名）、年中クラスが2クラス（1クラスおよそ30名）、年長クラスが2クラス（1クラスおよそ30名）であった。年少クラスから年中クラス、年中クラスから年長クラスに進級する際にはクラス替えがあり、筆者が観察を行った年中クラスから年長クラスへの進級では、前の学年で同じクラスだった仲間と別のクラスだった仲間がほぼ半数ずつ混在していた。

調査対象児と調査期間

筆者が観察を行ったのは2006年9月時点で年中クラス（R組、Y組）に所属していた園児で、この園児たちが年長クラス（B組、G組）に進級し卒園する2008年3月まで観察を継続した。なお分析には、2007年1月から2007年11月半ばまでの約11ヶ月間のデータを用いた。

幼稚園での生活スケジュール

園児の生活スケジュールは次の通りである。ほとんどの園児は親に伴われて朝8時半から9時ごろに登園してきた。登園後、園児たちはまず自分の教室に入りかばんを所定の棚にかけ、連絡帳を所定の場所に置くなどの日課を済ませることになっていた。これが終わると、園児は園庭や教室で自由に遊ぶことができ、天気の良い日ならば園庭に出て遊具や砂場で遊んだり、鬼ごっこを楽しんだり、あるいは昆虫さがしをしたりする様子が観察された。この自由遊びの時間はたいてい10時半ごろまでで、その後それぞれの教室で朝のごあいさつが行われた。この朝のごあいさつでは、園児は自由に椅子を並べて着席し、出席の確認、お祈り、歌などが続いて行われた。曜日によって多少の違いはあるものの、朝のごあいさつの後は、昼食まで部屋でお絵かきやブロックなどで遊ぶことが多かった。11時半から12時ごろになると昼食の準備のために担当教師がテーブルを部屋に配置し（図1-bも参照のこと）、園児は自由に好きな場所に座ってよいことになっていた。

昼食後も自由遊びの時間があり、1時半ごろになると、帰りのごあいさつのため朝と同様にふたたび園児は円状に椅子を並べるよう指示された。この着席においても、椅子の位置はとくに決められておらず、園児の自由意思に任せられていた。

観察手続き

筆者は原則として週に1回、朝9時ごろから昼食ごろまで、あるいは降園時まで幼稚園にいた。園にいるあいだは、自由遊びの時間には子どもたちと遊び、その後、教室に入ったあとはとくに観察対象を定めず園児どうしのやりとりや先生と園児のかかわり、座席の決定までの様子などをフィールドノートにメモするなどして、不自然でない範囲で園児たちとのかかわりを持った。ただし、本研究の分析に用いた朝と帰りのごあいさつでの着席場面と昼食場面では、なるべく子どもたちとのかかわりを持たず少し距離を置くようなかたちで園児の行動記録を行った。

年中クラスも、また年長クラスも、2クラスから構成されていたため、ある週にいっぽうのクラスの観察を行うと、その次の週は他方のクラスを観察するという方法でまんべんなくデータが集められるよう工夫した。ただし、朝のごあいさつと昼食時のデータに関しては、同じ日に両方のクラスで記録を取ることでも可能であったため、そのようにしてデータを収集することもあった。

分析

データは、4つの時期に分けて集計を行った。年中クラスの1~3月のデータ、年長クラスの4~5月(以下「年長Ⅰ期」と表記する)のデータ、6~7月(以下「年長Ⅱ期」)のデータ、そして夏休み明けの9~11月(以下「年長Ⅲ期」)のデータ、の4つである。このうち詳細に分析を行ったのは進級後の年長Ⅰ~Ⅲ期のデータで、年中クラスのデータは、進級後の仲間関係に年中クラスのとときの仲間関係がどのように影響しているかを検討するための基礎資料と位置づけた。

座席場面での園児どうしの近接のデータは次のように得点化した。まず朝のごあいさつ、帰りのごあいさつのデータについては、それぞれの園児ごとに左右両隣の相手をもっとも親密であるとみなして「2点」を配し、一人置いて隣に座っていた相手には1点を配した(図1-a)。昼食時のデータについては、両隣の相手に2点、真正面の相手に1点を配した(図1-b)。さらに、これらの得点を先ほどの4つの時期それぞれについて相手ごとに加算して序列化し¹⁾、その数値が何点以上ならば偶然とはいえないレベルに達しているかを児それぞれの出席回数、観察回数も考慮に入れつつ計算し、その基準を超えていた相手を仲良し相手とみなした²⁾。

なお、児ごとに観察回数が異なるため、 $\langle \text{加算得点} \div \text{観察回数} \div 2 \rangle$ を近接得点とし、以降の分析に用いた($0 \leq \text{近接得点} \leq 1$)。

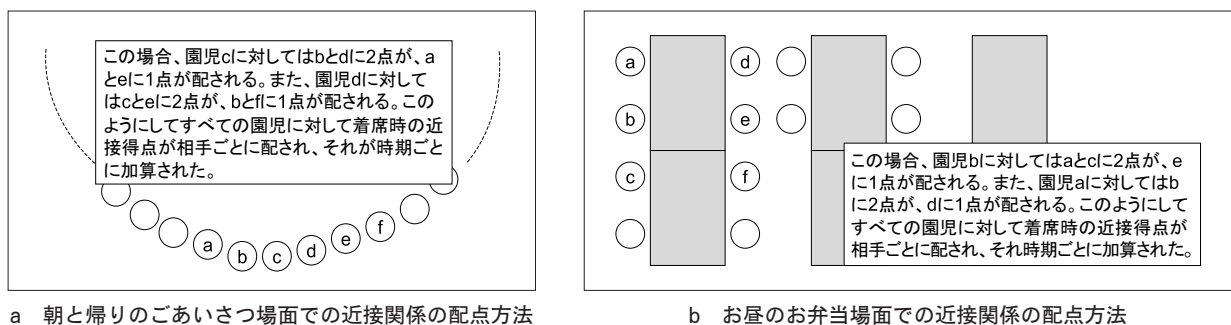


図1 近接関係の配点方法

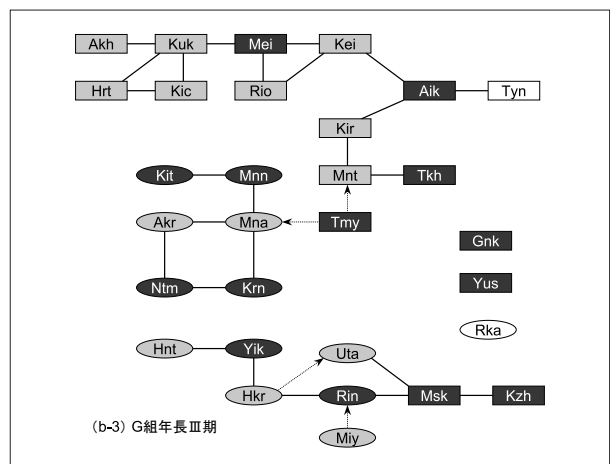
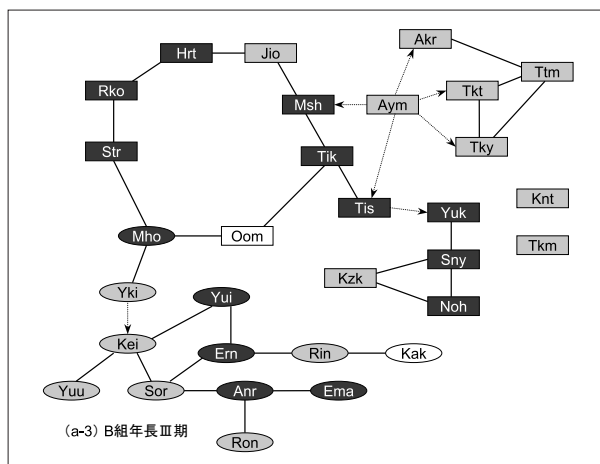
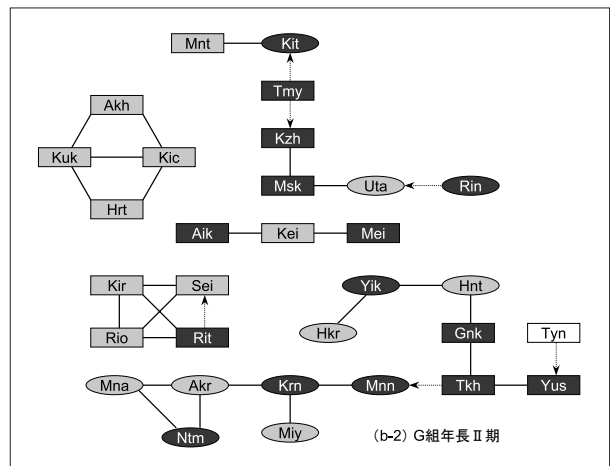
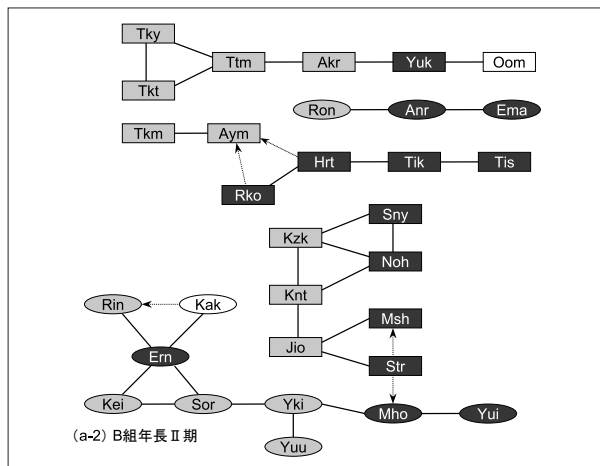
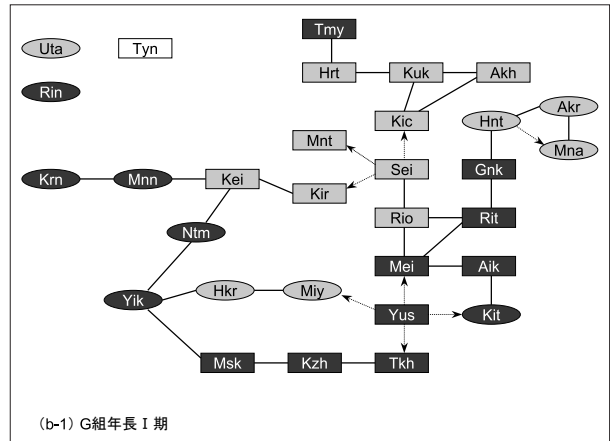
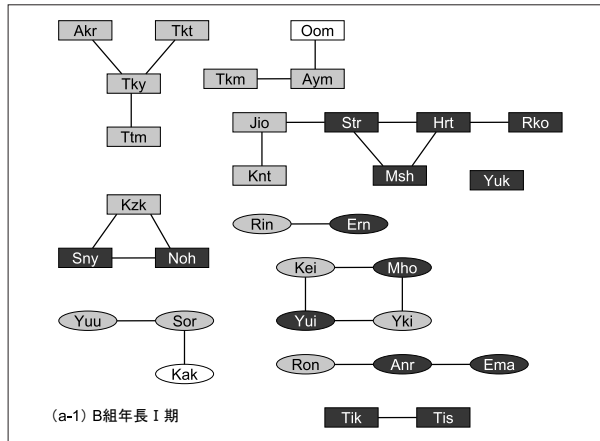
- 1) あいさつ場面での近接関係と昼食場面での近接関係に対応があるかを確かめるため、クラスごと、また時期ごとに得点の相関を調べた。その結果、数名を除いて非常に高い相関関係が認められた。このことから、あいさつ場面のデータと昼食場面のデータを合わせて分析することには妥当性があると判断した。
- 2) たとえば、a君の観察回数が5回で、同じクラスのb君(b君の観察回数も同じく5回であったとする)に対する近接の得点が5点であったとする。この5点という数値が偶然とはいえない、すなわち有意なレベルであるかを判断するためには以下の計算を行った。すなわち、5回の観察で5点となるための組み合わせは、各回の得点が $\langle 2, 2, 1, 0, 0 \rangle$ 、 $\langle 2, 1, 1, 1, 0 \rangle$ 、 $\langle 1, 1, 1, 1, 1 \rangle$ の3通りのいずれかになるときである。このようになる確率を計算し、さらに6点、7点、8点、9点、10点となる確率も同様に計算する(最大値は $2 \times 5 = 10$ 点なので)。これらの確率を合計したものが0.05、つまり5%未満であることが確認された場合、この5点という数値が統計的に有意なものであると判断するのである。なお、欠席などにより観察回数は児によって異なるうえ、当人は出席していても相手が欠席しているというような場合もあるため、a君からみたb君への点数とb君からみたa君への点数とが必ずしも一致するとは限らない。したがって、ある時期の分析において、a君にとってb君が仲良しの基準を満たしたからといって、b君からもa君が仲良しの基準を満たすとは限らない。

結果

統計的な処理に基づくクラス全体の特徴

座席の位置に基づく近接関係のデータから、B組とG組の年長Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ期のそれぞれのソシオグ

ラムを図2に描いた。なお、この図では、脚注²⁾に記した方法に基づき偶然とは言えないレベルで近接のあった相手に対してだけ線がのびている。また、園児どうしをつなぐ線が実線で記されているものは、双方向的に得点が基準を超えていたことを意味する。



○ は女兒であること, □ は男兒であることを示す。また, ■ は年中クラスでR組であったことを, ▨ は年中クラスでY組であったことをあらわす。
 — は、双方向的に近接得点が基準値を上回っていたペア, - - - - -> は一方からのみ近接得点が基準を上回っていたペアであることを意味する。

図2 クラスごと、時期ごとにみたクラス内の近接関係

B組では、こうしたペアは年長Ⅰ期に24組、年長Ⅱ期に29組、年長Ⅲ期に28組あり、G組ではそれぞれ25組、26組、25組であった。各期においてほとんどの園児がクラス内のいずれかの相手とそうした関係を持っていたが、一部でそのような相手がないケースもあった(B組年長Ⅰ期のYuk、年長Ⅲ期のKnt、Tkm、G組年長Ⅰ期のUta、Tyn、Rin、年長Ⅲ期のGnk、Yus、Rka)。また、あとも述べるように、時期を超えて関係が継続していたペアもあったが、そうでないペア、すなわちある時期においてしか特異的な関係がみられないようなペアもかなり存在した。

図2に基づき、実線で結ばれているペアに注目して性別による偏りがなにかを分析した。B組、G組それぞれ男女の人数構成をもとに期待値をもとめ、その期待値と実測値とのずれを χ^2 検定により検討した。その結果、B組、G組のいずれにおいても、また年長Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ期のいずれの時期においても偏りは有意で($\chi^2 > 8.08$, $p < .05$)、残差分析により男児どうし、女児どうしのペアが圧倒的に多く、異性のペアは有意に少ないことがわかった。幼児期の仲間関係が同性どうしのつながりを軸に展開していることは、多くの先行研究でも確認されているとおりで、本研究の結果もそれを支持するものといえた。

次に、年長Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ期の近接関係を年中クラスのそれと比較するために、年中クラスにおいても特異的に近接の多かった相手と進級後も再び同じクラスに在籍しているケースがどのくらいあるかを調べた。B組では、他の園から年長クラスに転入してきた2名を除く29名のうち24名が、そうした相手の少なくとも1人と年長クラスで同じクラスになっていた。いっぽう、G組ではこれが30名中16名であった。すなわち、G組に比べB組のほうが、前年度クラスからの仲良しペアが多数含まれていた。

こうした違い自体が、B組、G組の園児たちの近接関係に潜在的な影響を及ぼした可能性も考えられるが、この点についてはまたあとで触れることにする。

では、図2において実線でつながれていたペアのなかで、前年度のクラスにおいても特別に近接の多かったペアがどの程度含まれていたであろうか。それを示したものが表1である(表4も参照のこと)。この表では、年長Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ期において近接が多かった(実線の)ペアを(1)年中クラスにおいても基準を超えて近接が多かったペア、(2)年中クラスでも同じクラスであったが当時の近接関係は特別に多いわけではなかったペア、(3)年中時にはクラスが別であったペア、の3つに分類されている。この分布が期待値と比較して偏っているかを統計的に調べたところ、B組、G組のいずれにおいても、またどの時期においても期待値からの偏りは有意で($\chi^2 > 12.26$, $p < .01$)、残差分析の結果、すべてにおいて年中クラス在籍時に近接の多かったペアの割合が期待値より高いことが明らかになった。つまり、年中クラスにおいて近接していることの多かった相手とは進級後も引き続きよく近接していたことがわかった。

次に、この表1の(1)、(2)、(3)の分布がB組とG組とで異なるかどうかを時期ごとに比較した。その結果、年長Ⅰ期においてはクラス間の差が有意で($\chi^2 = 8.71$, $p < .05$)、残差分析の結果、G組では(2)すなわち、前年度も同じクラスにいたが近接は特別に多いわけではなかった者どうしのペアの比率がB組に比べ高いことが明らかになった。年長Ⅱ、Ⅲ期については、こうしたクラス間の差は有意ではなかった。

さてここまでのところでは、近接の程度を示す得点が双方向的に基準を超えていた(図2では実線で示されている)ペアに注目してきた。そこで以下で

表1 各期で多くの近接がみられたペアの前年度クラスでの関係

クラス	時期	前年度同じクラスであったペア		(3)前年度は異なるクラスであったペア
		(1)前年度も近接が多かったペア	(2)前年度は特別に近接が多くなかったペア	
B組	年長Ⅰ期	11	2	9
	Ⅱ期	10	6	11
	Ⅲ期	5	10	10
G組	年長Ⅰ期	6	12	7
	Ⅱ期	4	9	13
	Ⅲ期	4	7	13

注：他園から年長クラスに転入してきた児(B組のOom、kak、G組のTyn、Rka)を含むペアは除外してある。

表2 基準を超えた近接得点が確認された相手数

クラス	年長Ⅰ期	年長Ⅱ期	年長Ⅲ期
B組	1.55	2.03	2.00
(SD)	(0.72)	(0.87)	(1.03)
G組	1.83	1.86	1.93
(SD)	(1.10)	(0.79)	(1.00)

注：数値は平均人数を表す。

は、個々の園児に着目し分析を行っていく。なお、前年度のクラスで近接の程度が基準を超えていた相手と年長クラスにおいても同じクラスになったケースは、先述のとおり B 組と G 組とで人数にかなりの違いがあった。このことの効果を見るうえでも分析はクラスごとに行ったほうが妥当であると判断し、そのようにした。

近接の程度が基準以上であった相手が園児それぞれについて何人いたか、またその人数が時期を経てどう変動したかを統計的に確認した。なお、予備的な分析において男女差は認められなかったため、園児の性別は変数に組み入れなかった。まず、時期（年長Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期）を被験者内要因、近接が基準を超えて多かった相手の人数を従属変数とする一元配置の分散分析を行った。その結果、B 組では時期の主効果が有意で ($F=3.91, p<.05$)、Tukey の多重比較から、年長Ⅰ期に比べ年長Ⅱ、Ⅲ期においてのほうが有意に仲良しの相手が多いことがわかった（表 2）。すなわち、B 組では、時期を経るにしたがって関係の広がりが見られた。同じ分析を G 組についても行ったが、こちらは時期による主効果が認められなかった。

では、前年度のクラスにおいて近接が多かった相手と進級後も同じクラスになったのか、あるいはそうでなかったのかによって、仲良し相手の人数に違いはあるのだろうか。また、そうした相手が前年度も同じクラスにいた者と別のクラスにいた者のどちらかに偏るといようなことはないだろうか。以上のことを検討するため、前年度のクラスでよく近接していた相手と今度も同じクラスになった園児（A 群）と、そのような相手が年長クラスにはいなかった園児（B 群）とに分け、時期（年長Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ

期）と近接相手との前年度クラスでの異同（その相手と前年度も同じクラスだったか、あるいは別のクラスだったか）を被験者内要因とする繰り返しのある二要因の分散分析を行った（表 3）。

B 組の（A）群については、相手との前年度クラスでの異同の主効果が有意に近く ($F=3.95, p<.06$)、前年度同じクラスであった者のほうが、前年度別のクラスであった者よりも、仲良し相手として多く選ばれていた。その他の主効果、交互作用は有意でなかった。B 組の（B）群については、主効果、交互作用ともに有意差が認められなかった。また、G 組の（A）群については交互作用が認められたため ($F=6.08, p<.01$)、下位検定として単純主効果を調べた。その結果、年長Ⅰ期には、前年度同じクラスにいた者のほうがそうでない者よりも仲良し相手として多く選ばれていたが、年長Ⅱ期、Ⅲ期ではそのような差が認められなかった。また、年中クラスでは別のクラスであった者は年長Ⅰ期からⅡ、Ⅲ期にかけて有意に増加していることがわかった。G 組の（B）群においても交互作用が有意に近かった ($F=2.85, p<.08$)。下位検定の結果、年長Ⅰ期には、前年度同じクラスにいた者のほうが別のクラスにいた者よりも仲良し相手として多く選ばれていた。

個別のデータからみた近接関係の変化

ここまで述べてきたことは統計的な裏付けをもった結果であった。だが、その事実はいくまで平均値としてのことにすぎず、一人ひとりの園児の動きにまで目線を下げるとそこにはかなりの個人差が存在することも考えられる。そこで、このあとの分析ではそうした個体レベルの分析を手がかりに個々の園児の特徴やパターンを見いだしたい。なお、ここで

表 3 各期で多くの近接がみられた相手数と前年度におけるクラスの異同との関連

ク ラ ス	年長Ⅰ期		年長Ⅱ期		年長Ⅲ期		
	前年度も同じ クラスで あった相手	前年度は異 なるクラスで あった相手	前年度も同じ クラスで あった相手	前年度は異 なるクラス であった相手	前年度も同じ クラスで あった相手	前年度は異 なるクラス であった相手	
B 組	(A)前年度のクラスで近接が多かった相手と進級後も同じクラスになった児	1.04 (0.81)	0.71 (0.81)	1.25 (0.68)	0.83 (0.76)	1.29 (0.86)	0.83 (0.82)
	(B)前年度のクラスで近接が多かった相手と進級後は同じクラスにならなかった児	0.40 (0.55)	0.60 (0.55)	0.60 (0.89)	1.40 (1.52)	0.60 (0.55)	1.00 (1.00)
G 組	(A)前年度のクラスで近接が多かった相手と進級後も同じクラスになった児	1.50 (0.89)	0.25 (0.45)	1.25 (1.13)	0.75 (0.68)	1.00 (0.89)	1.10 (0.91)
	(B)前年度のクラスで近接が多かった相手と進級後は同じクラスにならなかった児	1.25 (0.87)	0.83 (0.72)	0.67 (0.88)	1.08 (0.79)	0.75 (0.75)	0.92 (0.79)

注：() 内の数値は SD

も先ほど述べたのと同じ理由から、B組、G組それぞれに分けて分析結果を示す。

表4は、B組、G組の園児一人ひとりが年長Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期を通じて、具体的にだれとよく近接していたかを時系列的に示したものである。この図では、これまでのところで示した統計的な資料との対応も意識して、前年度のクラスで近接が多かった相手と進級後も同じクラスになった場合と、そうした相手と同じクラスにならなかった場合とに分け、さらに前者に該当する園児については、ペアの双方のデータを比較できるように配置してある。

B組について

・前年度(年中)クラスで近接の多かった相手と進級後も同じクラスになった児の特徴

B組では、年中クラスにおいて近接が多かった相手と進級後も同じクラスになり、その相手との近接が年長クラスにおいても引き続き維持されていたペアが5組10名あった(NohとSny, TikとTis, HrtとRko, AnrとEma, TtmとTky)。これらのケースを仔細に見ると、おおよそ4つのパターンが考えられた。第一に、前年度からの関係を維持しながら、別の相手との関係も新たに展開し、しかもその相手との関係を二人が共有しているパターンで、NohとSnyがこれに該当した。NohとSnyは、お互いの関係を保ちながら、Kzkとの近接も多かった。次に第二のパターンとして、互いの関係を保ちながら、それぞれが別の仲間との関係を展開していくケースで、TikとTisがこれに該当した。Tikの場合、Hrt(年長Ⅱ期)、Oom(年長Ⅲ期)、Msh(年長Ⅲ期)との近接がみられたが、TisはTikとは異なり、Yuk(年長Ⅲ期)との近接が多く観察された。第三のパターンは、この第一、第二のパターンを融合したものである。HrtとRko, TtmとTkyがこれに該当する。HrtとRkoは、年長Ⅱ期においては共にAymとよく近接していたが、Hrtは、Msh(年長Ⅰ期)、Tik(年長Ⅱ期)、Jio(年長Ⅲ期)との近接も観察されたのに対し、Rkoは、Str(年長Ⅲ期)との近接を展開していた。TtmとTkyは互いどうしの近接以外でも共通の相手と近接していたが、その時期に多少のずれがみられた。TtmはTktと年長Ⅱ期、Ⅲ期によく近接していたが、TkyはTktとすべての時期にわたってよく近接していた。また、Akrとの近接も、Ttmは年長Ⅱ期、Ⅲ期によく観察されたが、Tkyは年長Ⅰ期にAkrとよく近接していた。第四のパター

ンは、ペアのいっぽうが別の相手との関係を積極的に展開していくのに対し、他方はその広がりが見られないケースで、AnrとEmaがこれに該当した。Anrは、年長Ⅰ期の時点ですでに、EmaのほかにRonともよく近接しており、この関係は年長Ⅱ期、Ⅲ期まで持続していた。さらにAnrは、年長Ⅲ期にはSorとも頻繁に近接していた。これに対し、Emaのほうは、Anr以外の相手とは基準値を超える近接が確認されなかった。

さらに、夏休み前の年長Ⅱ期までは前年度からの関係が確認されたものの、夏休みを過ぎた年長Ⅲ期にはそれが解消されたペアが2組4名みられた。これらを見ると、互いに別の相手との関係へと移行していくケース(KntとJioのペア)と、いっぽうは別の相手との関係へ移行していくもの他方はそうした関係が展開されていないケース(AymとTkmのペア)が確認できた。

StrとMshの関係においては、Strの側からみれば年長Ⅱ期までMshとの近接が多かったが、Mshの側からみるとStrは年長Ⅰ期においてのみ近接得点が基準を超えており、それ以降は名前が挙がっていなかった(これは脚注²⁾に記した事情による)。年長Ⅰ期にはこの二人にHrtが加わって3人がよく近接していたものの、Mshは、年長Ⅱ期以降はJio(年長Ⅱ期、Ⅲ期)やTik(年長Ⅲ期)と頻繁に近接しており、いっぽうStrは年長Ⅱ期にはMshと同じくJioと頻繁に近接していたものの、それ以降はMho(年長Ⅱ期、Ⅲ期)、Rko(年長Ⅲ期)との関係が中心を占めるようになっていった。

年長Ⅰ期においてのみ前年度からの関係が維持され、それ以降はそうした関係が目立たなくなってしまったケースもあった。SorとYuuの関係がこれに該当する。この二人は年長Ⅱ期、Ⅲ期においても共通の相手(年長Ⅱ期ではYki, 年長Ⅲ期ではKei)との近接がみられたが、この二人の間には一定以上の近接の関係が見られなくなった。また、Sorは年長Ⅱ期、Ⅲ期を通じて、Kei, Ernとの近接がよくみられ、年長Ⅲ期にはAnrともよく近接していたが、Yuuのほうは、先ほどのYki, Kei以外の名前は挙がっていなかった。

最後に、進級直後の年長Ⅰ期においてすでに、前年度クラスではよくみられた近接がみられなくなってしまったケースがあった。Kzk, Mho, Yui, Yki, Keiがこれにあたる。KzkはSnyやNohとの近接がよくみられ、観察期間中、一貫してこの関係を維持していた。MhoとYuiは、前年度のクラス

表4-a 個別にみた近接相手の変化 (B組)

前年度 近接の多かった相手と進級後も同じクラスになった児 (24名)					前年度 近接の多かった相手と進級後も同じクラスになった児 (つづき)				
前年度 近接の多かった相手に多かった相手	年長Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期		前年度 近接の多かった相手に多かった相手	年長Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	
Noh					Str				
Sny ★	①	②	①		Hrt ★	①			
Kzk	②	①	②		Msh ★	②	②		
Knt		③			Jio ☆	②	①		
Sny					Mho ☆		③		①
Noh ★	①	①	①		Rko ☆				①
Kzk	②	②	②		Msh				
Yuk ☆			③		Str ★	①			
Tik					Hrt ☆	①			
Tis ★	①	①	③		Jio ☆		①		①
Hrt ☆		②			Tik ☆				②
Oom			①		Sor				
Msh ☆			②		Yuu ★	①			
Tis					Kak	②			
Tik ★	①	①	①		Kei ☆		①		②
Yuk ☆			②		Ern		②		③
Hrt					Yki ☆		③		
Str ★	①				Anr				①
Rko ★	②	①	①		Yuu				
Msh ☆	②				Sor ★	①			
Tik ☆		②			Yki ☆		①		
Aym		③			Kei ☆				①
Jio			②		Kzk				
Rko					Noh	①	①		①
Hrt ★	①	①	①		Sny	②	②		②
Aym		②			Knt ★		③		
Str ☆			②		Mho				
Ttm					Yki	①	①		②
Tky ★	①	②	①		Kei	②			
Tkt ☆		①	③		Yui ★		②		
Akr ☆		②	②		Oom				①
Tky					Str ☆				②
Tkt ☆	①	②	②		Yui				
Ttm ★	②	①	①		Yki	①			
Akr ★	③				Kei	②			
Anr					Mho ★		①		
Ema ★	②	②	②		Ern ☆				①
Ron	①	①	①		Kei				①
Sor			③		Yki				
Ema					Mho	①	①		①
Anr ★	①	①	①		Yui	②			
Knt					Yuu ☆		②		
Jio ★	①	①			Sor ★		③		
Kzk ★		①			Kei ★				②
Noh		①			Kei				
Jio					Mho	①			
Knt ★	①	③			Yui	②			③
Str	②	①			Sor ☆		①		①
Msh		①			Ern		②		
Hrt			①		Yuu ☆				②
Aym					Kak				
Tkm ★	①	①			Yuk				
Oom	②				Akr		①		
Tky ☆					Oom		①		
Akr ☆					Sny ☆				①
Tkt ☆									
Msh									
Tis									
Tkm									
Aym ★	①	①							

前年度 近接の多かった相手と進級後は異なるクラスになった児 (5名)				
前年度 近接の多かった相手に多かった相手	年長Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	
Akr				
Tky ☆	①			
Ttm ☆		①		
Yuk		②		①
Tkt				
Tky ☆	①	②		
Ttm ☆		①		①
Ron				
Anr	①	①		①
Ern				
Rin	①	③		②
Kak		①		
Sor		①		①
Kei		③		
Yui ☆				③
Rin				
Ern	①	①		①
Kak				②

注1: 近接の得点が基準を超えていた相手、すなわち偶然とはいえないレベルでの近接が確認された相手のみがリストに示されている。
 注2: ○の中の数値は、それぞれの園児について当該時期内で何番目にその相手との近接が多かったかを示したものである。
 注3: ☆は前年度すなわち年中クラスにおいても同一のクラスに在籍していた児であることをあらわす。また、★はそのうち、前年度クラスにおいても近接の頻度が基準を超えて多かった相手であることを示す。

表 4-b 個別にみた近接相手の変化（G組）

前年度 近接の多かった相手と進級後も同じクラスになった児（16名）				前年度 近接の多かった相手と進級後は異なるクラスになった児（14名）			
近接が基準値以上に多かった相手	年長Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	近接が基準値以上に多かった相手	年長Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期
Kio				Hrt			
Kuk ★	①	①	①	Kuk ☆	①	①	①
Akh ☆	②	①		Kic ☆	②	②	②
Hrt ☆	②	③	②	Tmy	②		
Kuk	年長Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	Akh	年長Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期
Akh ☆	①	①	③	Kuk ☆	①	①	①
Kic ★	②	③	②	Kic ☆	②	②	
Hrt ☆	③	②	①	Sei	年長Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期 ^a
Mei			④	Rio ☆	①	①	—
Kzh	年長Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	Kic ☆	②		—
Msk ★	①	①	①	Kir ☆	②	②	—
Tkh ☆	②			Mnt ☆	④		—
Msk	年長Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	Yus	年長Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期
Kzh ★	①	①	②	Tkh ☆	①	①	
Yik ☆	②			Mei ☆	①		
Uta		②	③	Miy	①		
Rin ☆			①	Kit ☆	④		
Akr	年長Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	Gnk	年長Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期
Hnt ☆	①			Rio ☆	①		
Mna ★	②	③	①	Hnt	①	①	
Ntm		②	①	Tkh ☆		②	
Krn		①		Rit	年長Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期 ^a
Mna	年長Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	Rio	①	②	—
Akr ★	①	①	①	Gnk ☆	②		—
Ntm		①		Mei ☆	③		—
Krn			②	Kir		①	—
Mnn			③	Sei		③	
Krn	年長Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	Hkr	年長Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期
Mnn ★	①	②		Yik	①	①	①
Rin ☆		①		Miy ☆	②		
Miy		③		Rin			①
Mna			②	Uta			③
Ntm			①	Yik	年長Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期
Mnn	年長Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	Hkr	①	①	①
Krn ★	①	①		Msk ☆	②		
Kei ☆	②			Ntm ☆	③		
Kit ☆			①	Hnt		②	①
Mna			②	Rio	年長Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期
Aik	年長Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	Rit	①	③	
Kit ☆	①			Mei	②		②
Mei ★	②			Sei ☆	③	②	
Kei		①	①	Kir ☆		①	①
Kir			②	Kei ☆			③
Tyn			③	Kei	年長Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期
Mei	年長Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	Mnn	①		
Aik ★	①			Kir ☆	②		
Rio	②		①	Ntm	③		
Rit ☆	③			Mei		①	③
Kei		①	②	Aik		②	①
Kuk			②	Rio ☆			②
Hnt	年長Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	Ntm	年長Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期
Akr ★	①			Yik ☆	①		
Gnk	②	①		Kei	①		
Mna ☆	③			Akr		①	②
Yik		②	①	Mna		②	
Tmy	年長Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	Krn			①
Hrt	①			Uta	年長Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期
Kit ★		①		Msk		①	①
Kzh ☆		①		Rin		②	
Mnt			①	Miy	年長Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期
Mna			①	Hkr ☆	①		
Kir	年長Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	Krn		①	
Kei ☆	①			Rin			①
Rit		①		Mnt	年長Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期
Rio ☆		②	①	Kit		①	
Sei ☆		③		Kir ☆			①
Mnt ★			①	Tkh			②
Aik			③				
Rin	年長Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期				
Uta		①					
Msk ☆			①				
Hkr			②				
Tkh	年長Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期				
Kzh ☆	①						
Yus ☆		①					
Mnn ☆		①					
Gnk ☆		③					
Mnt			①				
Kit	年長Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期				
Aik ☆	①						
Mnt		①					
Mnn ☆			①				

^a 転居のためⅢ期にはこのクラスに在籍しなかった。

においてよく近接し合っていたが、年長Ⅰ期の時点では近接がさほど多くなかった。ただ興味深いのは、この二人のいずれにおいても、YkiとKeiが年長Ⅰ期にエントリーしている点であった。なお、Mhoはこのあと、Ykiとの近接を年長Ⅲ期まで維持していたのに対し、Yuiはそうした持続的な関係を展開していなかった。この二人はまた、年長Ⅱ期にはよく近接しているが、年長Ⅲ期には再び近接があまりみられなくなり、互いに別の相手とよく近接していた。Ykiは、Mhoとの近接が年長Ⅰ期からⅢ期までよくみられた。年長Ⅰ期には前年度のクラスで近接が多かったSorやKeiとあまり近接していなかったが、年長Ⅱ期にはSorと、年長Ⅲ期にはKeiとよく近接していた。

・前年度(年中)クラスにおいて近接の多かった相手と同じクラスにならなかった児の特徴

B組では、前年度のクラスで近接の多かった相手と別のクラスになってしまったケースもわずかながらあった(5名:Akr, Tkt, Ron, Ern, Rin)。これらの児がどのような近接関係を展開していったかについても考えてみたい。Akrは、Tky(年長Ⅰ期)、Ttm(年長Ⅱ期、Ⅲ期)など、前年度同じクラスであった相手と、Tktも同じく、前年度同じクラスであったTky(年長Ⅰ期、Ⅱ期)、Ttm(年長Ⅱ期、Ⅲ期)とよく近接していた。特に、Tktの場合、Tky、Ttmのいずれとも、前年度のクラスでは近接が一切見られなかったにもかかわらず、突然年長クラスにおいてよく近接するようになった。

Ronの場合、前年度は別のクラスであったAnrとの近接が年長Ⅰ期から継続してみられたが、Anr以外の相手とはこうした関係がみられなかった。ErnとRinは、前年度は互いに別のクラスであったが、年長Ⅰ期からⅢ期まで一貫してよく近接していた。

G組について

・前年度(年中)クラスで近接の多かった相手と進級後も同じクラスになった児の特徴

G組では、前年度のクラスで近接が多かった相手と進級後もふたたび同じクラスになったケースがB組よりも少なく、実数のうえではそうしたペアは10組16名(一部、重複があった)であった。これらのうち、観察期間すべてにわたって基準値を超える近接が続いたペアは3組(KicとKuk, MskとKzh, AkrとMna)であった。KicとKukは、互いによく近接しながら別の相手(Hrt, Akh)とも

それぞれによく近接しており、この関係は年長Ⅰ期からⅢ期まで続いた。KicとKukにとって、HrtとAkhは前年度のクラスにおいても同一クラスであったが、前年度は近接はさほど頻繁でなかった。また、MskとKzhの場合、MskはKzhと頻繁に近接しながらも、Yik(年長Ⅰ期)やUta(年長Ⅱ期、Ⅲ期)、Rin(年長Ⅲ期)ともよく近接しており、いっぽうのKzhは年長Ⅰ期にはTkhとの近接が頻繁に観察されたが、年長Ⅱ期以降はMsk以外の相手とは一定以上の割合での他児との近接が確認されなかった。さらに、AkrとMnaは、互いとの近接を維持するほか、一部の相手との関係を共有しながら別の相手との関係もそれぞれに展開していた。具体的にいうと、AkrもMnaも、年長Ⅱ期にはNtmとの近接が頻繁にあったが、Akrにかぎっては年長Ⅲ期においてもNtmとの近接を保っていた。また、Akrは年長Ⅱ期にKrnとの近接がよくみられたが、Mnaは年長Ⅱ期にKrnとの近接が頻繁に見られた。Mnaは、年長Ⅲ期になってMnnとよく近接していたが、AkrとMnnとの間では近接はあまり観察されなかった。

前年度のクラスにおいてよく近接していたKrnとMnnは、年長Ⅰ期、Ⅱ期には引き続き近接がよくみられたが、夏休み明けの年長Ⅲ期にはそれほど頻繁に近接することがなかった。Mnnは年長Ⅰ期の時点でKrnのほかにKitとの近接が頻繁にみられ、いっぽうのKrnもまた、年長Ⅱ期にRinやMiyとの近接がよくみられた。また、年長Ⅲ期にはKrnはNtmと、MnnはKitと近接が多かったことから、この二人は少しずつ別の相手とのかかわりに比重を移しつつあることが見てとれたが、いっぽうで年長Ⅲ期には双方ともにMnaとの近接があり、そのような意味で接点が全くなくなったともいえないようであった。

年長Ⅰ期においては前年度から続く関係がみられたものの、年長Ⅱ期以降はそうした関係が目立たなくなってしまうペアは2組(AikとMei, AkrとHnt)であった。年長Ⅰ期において、AikはMeiのほかにKitとの近接がよく観察され、MeiもRioやRitとの近接がよくみられた。年長Ⅱ期、Ⅲ期にはAikとMeiの直接的な近接はあまりなかったものの、いずれもKeiとよく近接していた。このほか、年長Ⅲ期には、AikはKirやTynと、MeiはRioやKukとよく近接していた。AkrとHntの近接関係の推移をみると、とくに年長Ⅱ期以降は関係の重なりがみられなかった。Akrは前年度のクラ

スにおいても親密であった Mna とよく近接していたほか、Ntm (年長Ⅱ期, Ⅲ期) や Krn (年長Ⅱ期) とともによく近接していたのに対し、Hnt は Gnk (年長Ⅰ期, Ⅱ期), Yik (年長Ⅱ期, Ⅲ期) との近接がよくみられた。

Tmy, Kir, Rin, Tkh, Kit は、前年度クラスにおいて近接のよくみられた相手とは、年長クラス進級後はあまり近接していなかった (例外として、年長Ⅱ期の Tmy からみた Kit との近接, 年長Ⅲ期の Kir からみた Mnt との近接)。これらを詳しくみると、Kir が年長Ⅱ期, Ⅲ期に Rio とよく近接していたのを除くと、ふたつ以上の時期をまたいで近接が持続して観察されたケースが少なく、時期ごとに近接の相手が異なっていた。

・前年度 (年中) クラスにおいて近接の多かった相手と同じクラスにならなかった児の特徴

G 組では、前年度のクラスで近接のよくみられた相手と引き続き同じクラスになることがなかった児が 14 名もいた。これらの児の近接関係の推移については大きく 4 つのパターンが考えられた。第一のパターンは、前年度同じクラスであった相手との近接がよくみられ、その関係が少なくとも夏休み前まで維持されたケースで、Hrt, Akh, Sei, Yus がこれに該当した。Hrt と Akh は、年度当初から、Kuk, Kic と頻繁に近接しており、この関係が年長Ⅱ期もしくはⅢ期まで続いた。Sei は、夏休み中に転出したため年長Ⅱ期までのデータしか分析できなかったが、前年度同じクラスであった Rio, Kir とよく近接しており、Kic と Mnt もまた、いずれも前年度同じクラスの相手であった。Yus の場合、Tkh とは年長Ⅰ期, Ⅱ期において近接がよくみられ、ほかに年長Ⅰ期によく近接がみられた Mei や Kei も、前年度同じクラスの相手であった。

第二のパターンは、前年度は別のクラスであった相手との近接が年長Ⅰ期からすでに比較的良好であったケースで、Gnk, Rit, Hkr, Yik がこれに該当した。Gnk は、年長Ⅰ期, Ⅱ期と Hnt とよく近接しており、Rit も年長Ⅰ期, Ⅱ期にかけて Rio とよく近接していた (なお、Rit は夏休み中に転出したため、年長Ⅲ期のデータがない)。Hkr と Yik は、前年度は別クラスであったが、互いとの近接が年長Ⅰ期からⅢ期まで継続してみられた点が特徴的であった。

Rio は、この第一のパターンと第二のパターンのほぼ中間にあたる特徴を示した。すなわち、前年度同じクラスにいた相手 (Sei, Kir など) とよく近

接しながらも、新たに同じクラスになった相手 (Rit, Mei) とともに進級後の比較的早い時点からよく近接していた。

第三のパターンは、年長クラスへの進級からやや時間が経過して年長Ⅱ期ごろになってようやく安定した近接関係が出現し、それが年長Ⅲ期まで持続したケースで、Kei, Ntm, Uta がこれに該当した。Kei の場合、Mei, Aik との関係がこれにあたり、Ntm の場合は Akr との関係が、また Uta の場合は Msk との関係がそうであった。特徴的だったのは、これらの相手がいずれも前年度は別のクラスの者であった点である。

最後に第四のパターンは同じ相手との近接が安定してみられるわけではなく、時期ごとに相手が次々に変わっていくケースで、Miy, Mnt がこれに該当した。Miy の場合、年長Ⅰ期には Hkr とよく近接していたが、年長Ⅱ期には Krn と、Ⅲ期には Rin との近接が多かった。いっぽう Mnt は、年長Ⅰ期には基準を超える近接相手がおらず年長Ⅱ期になって Kit との近接がよくみられたものの、年長Ⅲ期には Kit との近接もさほど頻繁でなくなり、代わって Kir や Tkh との近接がよくみられた。

考察

クラス全体としての特徴

繰り返し述べてきたように、B 組にはそもそも、前年度のクラスにおいても近接が多かった、いわば仲良しペアが G 組より多く含まれており、そうしたペアどうしの近接がいずれの時期においてもよく観察された。また偶然とは言えないレベルで近接が頻繁に観察された、そうした相手の数は、時期を経て増える傾向にあり、すなわち元のクラスからのつながりを軸としながら関係が広がっていた点が特徴的であった。しかしこのことは、逆に言えば元のクラスからのつながりがきわめて強かったために、新たに同じクラスになった者との関係が広がりにくかったとも解釈できるかもしれない。G 組では、前年度のクラスでの仲良しペアが B 組ほど多くは含まれていなかったものの、全体としてみると、前年度から続く仲良しペアが大きな割合を占めており、この点は B 組と同様であった。B 組との比較において G 組に特徴的だったことのひとつは、前年度のクラスでは近接がさほど多かったわけではないが進級ののち近接がよくみられたペアが、とくに年度当初に目立った点である。個別データからもこのこと

ははっきり確認され、前のクラスでの仲良し相手と別々のクラスになってしまった児を中心に、こうした前年度から続く“よしみ”のような関係が進級という移行期において大きな役割を果たしていた可能性が考えられた。さらにG組の中でも、前年度からの仲良し相手がいた児の場合、年長Ⅱ期そしてⅢ期にかけて、新たに同じクラスになった児との関係への広がり急速に進んでいた。B組との比較において考えると、G組ではもともと仲の良かったペアどうしのつながりが全体としてみればやや弱く、比較的早い段階で園児どうしの関係がダイナミックに変動を起こした可能性が高い。こうして、元のクラスではさほど仲が良くなかった者どうしや、新たに同じクラスになった者どうしの関わりが展開しやすかったのかもしれない。このようにB組とG組を比べてみると、クラス替えを行った際に、前のクラスでの仲良しペアがどの程度そこに含まれているかが、進級後の仲間関係に大きく左右することが示唆される。なお、この点については様々なケースを比較することによりさらに検討を加える必要があろう。

個体レベルでのデータからみた特徴

個別のデータからみても、前年度のクラスで親密な間柄にあった相手との関係が進級後も持続していく場合が多いことが全体として確認できた。だが、他の園児との関係の広がりという側面に目を向けてみると、そこにはかなりの個人差も認められた。前年度から続く仲良し関係を維持しつつ、そこに別の相手も組み入れていくようなケース（B組のNoh-Sny, G組のKic-Kukなど）があったほか、仲良し関係とは別にそれぞれが別個の異なる相手とも関係を展開していくケース（B組のTik-Tis, Hrt-Rko, G組のAkr-Mnaなど）、あるいはそうした新たな関係が深まっていくなかで、もともとあった仲良し関係がしだいに目立たなくなっていくケース（B組のKnt-Jio, G組のAik-Meiなど）など、その変化のありようは様々であった。また一部では、仲良しペアのいっぽうが積極的に新しい関係を展開していくのに対し、他方はそのように関係を広げていないと思われるケースも認められた（B組のAnr-Ema, G組のMsk-Kzh）。これらに加えて、前年度のクラスでは近接がよくみられたものの、進級後はかなり早い時点で近接があまりみられなくなることもあり、その場合にも、進級直後から新しい相手との関係を展開していくケース（B組のKzk,

Mhoなど）があるいっぽうで、特定の相手との安定した関係がどうも形成されていないと思われるケースもあった（B組のYuk, G組のRin, Tkh）。

以上の結果からみると、もともと仲の良かった者との関係を基盤にしながら、さらに関係の輪を広げていったと思われる児はたしかにいたが、なかなかそうした広がり安定してみられないケースもあったといえよう。もちろん、そのことがそれぞれの園児にとってどのように経験されていたかは別問題だが、少なくともそうした個人差があることをおとなは十分に認識しておく必要があろう。

いっぽう、前年度仲の良かった相手と同じクラスにならなかった場合については、G組での分析結果が様々な示唆を与えてくれた。第一に、統計的な処理から明らかになったこととも対応して、年度当初には前年度同じクラスであった者とのかかわりが比較的多くみられた。だが、すべての児がそうなのではなく、なかにはRitやHir, Yikのように、新たに同じクラスになった者と最初から積極的によくかかわり、その関係を維持していく場合があった。だが、これと対照的に、同じ相手と継続して近接を保つ様子が確認できなかったケースもあった（G組のMiy, Mntなど）。以上のように、クラス替えにおいて仲良しの相手と同じクラスにならなかったケースでも仲間関係の展開には個人差があり、とくにMiyやMntのようなケースでは、それが当人にとってどのような経験として受け止められているかにおとなは気を配る必要があると思われた。

討論

子どもが育つ環境を定めているのはおとなにほかならない。しかも多くの場合、おとなが子どもの発達にとって良いと考えてそのような環境を提供している。本研究が扱った「クラス替え」の実践もまた、多くの場合それが園児の発達に大きな意味をもち、とりわけ社会性の発達に刺激をもたらすとの想定のもとで行われているであろう。だが、そうしたおとな主導の子どもの環境移行が一人ひとりの子どもにとってどのような経験となっているのか、またおとなが期待するような変化がじっさいにみられるのか、個人差はないのかといったことがこれまでは十分に検討されてこなかった。

本研究が見出した結果から、そのようにして行われている「クラス替え」に対して、個人差はありながらも多くの園児がほぼおとなの予想どおりに仲間

関係を広げていることは確認できた。しかも、もともと仲の良かった友達との関係は園児がそうした関係を広げて行くうえで重要な役割を担っているとも思われた。

しかしいっぽうで、仲よし相手がクラスにいる状況においても、それ以外の仲間との関係を安定して作り上げていけなかったのではないかと思われるケースも確認された。また、そうした仲よし相手がはじめからいないことがその園児の仲間関係を狭くしていたのではないかと思われるケースもあった。進級、そしてクラス替えという環境の変化は子どもにとって大きなストレスを生み出すであろう。そうであるからこそ、おとなは前のクラスでのそれぞれの園児の仲間関係がどうであったかにも注意を向けながら、園児一人ひとりの様子をつぶさに観察することが必要である。

ただ本当のところ、子どもたちがクラス替えを通じて経験していたことをもっとリアルに把握するには、生活全般にわたってそれぞれの園児の動きを丹念に捉える必要があるだろうし、ちょっとした問いかけへの反応などにも絶えず注意を向けておくことが必要であろう。おとなが「こうであろう」、「こうに違いない」と予想・期待することが必ずしも子どもが経験していることと一致するわけではないという視点で、子どもの生活を眺めることが大切だと思われる。

引用文献

- 八野正男・高橋道子・岸学・岩立京子 (1990). 小学校低学年における友人形成過程の分析 東京学芸大学紀要 1部門 41, 209-226.
- 原孝成 (1997). 幼児における友だちのパーソナリティの理解：自分と知ってる子に対する友だちの行動予測 性格心理学研究, 5, 1-8.
- ハロウェイ, S. D. (2004). ヨウチエン 日本の幼児教育, その多様性と変化 (高橋登・南雅彦・砂上史子訳) 北大路書房 (Holloway, S. D. (2000) Contested Childhood: Diversity and Change in Japanese Preschools. Routledge)
- 謝文慧 (1999). 新入幼稚園児の友だち関係の形成 発達心理学研究, 10, 199-208.
- 稲垣宏樹・本郷一夫・伊藤裕子・鈴木智子・小泉友宇子 (1998). 環境移行が幼児の仲間関係に及ぼす影響 (3)：移行にともなうやりとりの内容の変化を中心に日本教育心理学会総会発表論文集, 40, 83.
- 小島康生 (2004). 子どもの発達環境調整者としての親の役割とその心理的背景 - 幼稚園選びの分析を通して - 中京大学心理学研究科・心理学部紀要, 3, 9-15.
- 中島寿子 (2000). 幼稚園生活の中で幼児は「お友達」

「仲間」をどのように捉えているのか - 二年保育年少組の一年間の記録から - 愛知教育大学研究報告 (教育科学編), 49, 133-142.

- 小川一夫・市河淳章 (1974). 学級における友人選択の変動 4 既成集団の崩壊過程 広島大学教育学部紀要 第一部, 12, 311-319.
- 長田勇・遠藤忠・石井仁・桜井均 (2000). わが国の小学校における規則的学級編制替え慣行の成立に関する実証的研究 日本教育学会大会研究発表要項, 59, 162-163.
- Super, C. M., & Harkness, S. (1986). The developmental niche: A conceptualization at the interface of society and the individual. *International Journal of Behavioral Development*, 9, 545-570.
- 高濱裕子・無藤隆 (1997). 移行期における仲間関係 - 新入園児の参入にともなう進級児の相互作用の変化 - 日本家政学会誌, 48, 279-287.
- 高橋道子・岸学・岩立京子 (1993). 小学校における友人形成過程の分析 (2) - クラス替えおよびコンピテンスとの関係 - 東京学芸大学紀要 1部門, 44, 173-183.
- 外山紀子 (1998). 保育園の食事場面における幼児の席とり行動：ヨコに座ると何かいいことあるの？ 発達心理学研究, 9, 209-220.
- Wapner, S., & Demik, J. (1992). 有機体発達論的システム論的アプローチ 山本多喜司・ワップナー, S. (編著) 人生移行の発達心理学 第2章 北大路書房 pp. 25-49.

(受理年月日 2008年9月30日)